

## 主 題：サマリヤの女との出会い

聖書箇所：ヨハネの福音書 4章1－18節

1週間空いただけでとても久しぶりな感じがしますが、愛する神様のことばをきょうも皆さんと学べる機会を本当に感謝しています。今朝はヨハネの福音書に戻って、特に4：1－18のところを中心に、イエス様とサマリヤの女が出会った場面について詳しく見ていきたいと思えます。おそらく多くの人がすでによく知っている話の一つかと思えます。まずはみことば全体をお読みしますので、よく耳を傾けてみてください。

ヨハネ4：1－18

「1 イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマを授けていることがパリサイ人の耳に入った。それを主が知られたとき、：2 ——イエスご自身はバプテスマを授けておられたのではなく、弟子たちであったが——：3 主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。：4 しかし、サマリヤを通って行かなければならなかった。：5 それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町にいられた。：6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は第六時ごろであった。：7 ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエスは「わたしに水を飲ませてください」と言われた。：8 弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。：9 そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」——ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである——：10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょうか。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょうか。」：11 彼女は言った。「先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。：12 あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を与え、彼自身も、彼の子たちも家畜も、この井戸から飲んだのです。」：13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。：14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出します。」：15 女はイエスに言った。「先生。私が渇くことがなく、もうここまできみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」：16 イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」：17 女は答えて言った。「私には夫はありません。」イエスは言われた。「私には夫がないというのは、もっともです。：18 あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。」

前回、ヨハネを学んでから少し時間が経っているので、いま一度、これまでの流れを思い返してみてください。私たちはここまで神の子キリストとして、この地上に来られたイエス様といろいろな人たちの出会いを見てきました。罪人を救うために天から来てくださった偉大な約束の救い主は、さまざまな立場にいる人たちに対して救いの手を差し伸べ続けてきたのです。たとえば、バプテスマのヨハネの弟子として歩んでいたアンデレやヨハネには「来なさい」と、自分の泊まっていたところに招いて時間をともにしようとされましたし、ガリラヤに行く途中で見つけたピリポには「わたしに従って来なさい」と、ご自分のもとへと招かれていました。旧約聖書に精通していたナタナエルには、ご自分がすべてをご存じであるまことの神様であることを明らかにすることで彼の心を砕きました。また、ユダヤ人の指導者であったニコデモに対しては、どのような人でも新しく生まれなければ、神の国に入ることは決してできないと教えておられました。

特に3章で見たニコデモは、人間的に考えれば、救いに最も近いと考えることができる存在でした。覚えていますか？彼ほど献身的で、宗教に熱く、道徳的に非難されるところもなければ、富や影響力、聖書の知識もたくさん持っていて、人々からうやまわれる人物はほかにはいなかったのです。しかし、どのような人も例外ではありませんでした。どのような立場の人であろうと罪人はみな同じように、救い主を必要としていたのです。救いは確かにすべての人に、ただ神様の恵みによって、神の子キリスト・イエスを信じる信仰によって与えられるものだったのです。

そして、この真理は私たちがこれから学ぼうとしている4章においても同じでした。後でより詳しく見ますけれども、今回の箇所が登場してくるサマリヤの女は、3章で見たニコデモとは正反対の存在でした。ニコデモが偉大な教師としてイスラエルの民から尊敬や称賛を集める者だったとすれば、サマリヤの女は民から拒絶された、忌み嫌われるような存在でした。ニコデモが宗教に熱心で、道徳的に正しい者であったとすれば、サマリヤの女は姦淫の罪に罪を重ね、まことの神様から遠く離れていた存在でした。ニコデモが救いに最も近いと考えられるすばらしく良い人だったとすれば、サマリヤの女は、救いから最も遠く離れた、墮落した最悪の人でした。

しかし、3章と4章を見比べて見る時に驚くべきは、その対照的なふたりの人物に対しても、救い主イエス様が同じように手を差し伸べておられたことです。言い換えれば、イエス様のあわれみを必要とさせないと言え人もいなければ、同時に、イエス様のあわれみからはるか遠く離れて、救いの御手が届かない人もひとりとしていないのです。文字どおり、すべての罪人はひとりひとり生まれながらに救い主のあわれみや恵みを必要とする者でした。全員同じです。

そして、きょう私たちはあわれみ深いイエス様の姿をみことばから改めて考えてみたいと思います。特にサマリヤの女と出会ったイエス様の場面を見る時に、愛するイエス様がどれほど優しいお方なのかを見て取ることができます。ですからもしまだこの救いを知らない人がいるのであれば、どれほどこの方があわれみ深いお方なのかを知って、この方を信じ受け入れてください。そして、もうすでにご存じだと言われる皆さん、どれほど大きなあわれみを受けたのかを改めて感謝して、イエス様にならう者として、ともにあわれみを示す者として、優しさを示す者として、成長していきましょう

## ●物語の背景 1－4節

まず、今回の物語を理解する上で重要な鍵となる場面、背景を頭に入れておきたいと思います。ヨハネ4：1－4に「:1 イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマを授けていることがパリサイ人の耳に入った。それを主が知られたとき、:2 ——イエスご自身はバプテスマを授けておられたのではなく、弟子たちであったが——:3 主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。:4 しかし、サマリヤを通って行かなければならなかった。」と書かれています。エルサレムの町にあって、商売の場になっていた主の宮を清めて、過ぎ越しの祭りを祝い、さまざまなるしを行って、徐々に弟子の数が増えていったイエス様が、ユダヤを去って北のガリラヤへ向かおうとしていました。

### ▶行かなければならなかった 4節

そして、その際に4節でイエス様は「サマリヤを通って行かなければならなかった」と言われるのです。注意してほしいのは、ここで「行かなければならなかった」と訳されていることばは、もうすでに見たように「何かしななければならない」という絶対的な必要性を訴えるものでした。この「何かしななければならない」というのは、絶対に必要な、絶対に起こらなければならない必要性を訴えるものでした。私たちが以前3章を学んできた時にいろいろな箇所で見してきました。たとえばヨハネ3：7に、イエス様がニコデモに対して救いについてこのように言っています。「あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思っはなりません。」と同じことばが使われています。14節を見ていただくと、イエス様はこのように言われています。「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければならない」と。これも同じことばです。そして、30節のところでは、バプテスマのヨハネがこのような

ことばを残していました。「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」と。これも同じことばが使われているのです。そして、その時にも言いましたけれども、新しく生まれるということが望まれるものだったのでなく、人の子が上げられることが好ましい選択だったのでなく、主が盛んになって自分が衰えることが大切な勧めの一つだったのでありません。それらのものは決して欠かすことのできない絶対に必要なものでした。それは起こらなければならないものだったので。

そして、それと同じレベルで、イエス様はここでサマリヤを通過して行かなければならなかったと言われていました。どうして通って行かなければならなかったのでしょうか？ご存じの方もいるかもしれませんが、この当時ユダヤ人とサマリヤ人の中には、非常に大きな敵意や憎しみが存在していました。純粋なユダヤ人たちは、サマリヤ人たちのことを汚れている者として、ひどく忌み嫌っていたのです。いったいどうしてそのような憎しみが彼らの間にはあったのでしょうか？その根源は、ソロモン王の死後に起きた出来事に深く結びついていました。難しいと思うかもしれませんが、少し思い出してみてください。ソロモン王様が王として君臨していた後、亡くなりました。亡くなった後、一つだったイスラエルの国は、北のイスラエルと南のユダの二つの国に分裂したのです。そして、特にサマリヤを首都としていた北のイスラエルは悪に悪を重ね続けました。次々に立てられた19人の王様たちは、すべて例外なく、主の前に悪に悪を重ね、罪の道を歩み続けていたのです。あわれみ深い神様は、そんなイスラエルの者たちに対して、「悔い改めて私のもとに帰ってきなさい」という優しいメッセージ、悔い改めの警告を、何度も何度も預言者を通して与え続けました。しかし、そんなメッセージに対して彼らはかたくなに拒み続けたのです。

そして、その結果約束されていたとおりに、神様の厳しい裁きが彼らの上を下ったのです。紀元前722年にアッシリヤの侵攻を受けた北イスラエルは、敗北して多くの民たちは捕らえられて、アッシリヤへと連れて行かれることになりました。これがアッシリヤ捕囚という歴史的事実です。アッシリヤ捕囚という神様の非常に厳しいさばきが、イスラエルの民たちに起こったのです。しかし、覚えていてほしいのは、アッシリヤの王様がただ捕囚を行っただけではなく、非常に興味深いことも実践したことです。何をしたかと言うと、自分たちが奪い取ったサマリヤの町に、ほかのいろいろな国から異邦人を連れて来て、住ませ始めたのです。その時の様子が、Ⅱ列王記17：22-24に記されています。このように言われています。「：22 イスラエルの人々は、ヤロブアムの犯したすべての罪に歩み、それをやめなかったので、：23 ついに、【主】は、そのしもべであるすべての預言者を通して告げられたとおりに、イスラエルを御前から取り除かれた。こうして、イスラエルは自分の土地からアッシリヤへ引いて行かれた。今日もそのままである。：24 アッシリヤの王は、バビロン、クテ、アワ、ハマテ、そして、セファルワイムから人々を連れて来て、イスラエルの人々の代わりにサマリヤの町々に住ませた。それで、彼らは、サマリヤを占領して、その町々に住んだ。」と。少し想像してみてください。サマリヤの町に、いろいろな者たちが入り込んできました。その町は次第にどのようになっていったと思いますか？言うまでもなく、そこに残っていた少数のユダヤ人たちとほかからやって来たいろいろな民族の人たちは結婚したりして、次第に人種が混ざっていきました。また加えて、町にはいろいろな国の習慣や宗教も持ち込まれて、かつて持っていたまことの神様に対する礼拝も失われていったのです。サマリヤの町は、いろいろなものが混ざっていくようになり、混沌としていたのです。それを知った純粋で忠実なユダヤ人たちは、そんな彼らのことを見て何を思ったのでしょうか？簡単に想像できますよね。彼らは人種にしろ、宗教にしろ、慣習にしろ、いろいろなものが混ざり合っている者たちのことを不純で汚れた存在として軽蔑していたのです。まことの神様を捨てて、外国の神様を拝んでいる中途半端な者たちを激しく忌み嫌ったのです。そして、その憎しみが余りにも強かったからこそ、「サマリヤ人」ということばは、だれかを侮辱するのに使われたりもしました。

たとえば、ユダヤ人たちも実際にイエス様に対してこのようなことばを投げかけています。ヨハネ8：48に「ユダヤ人たちは答えて、イエスに言った。「私たちが、あなたはサマリヤ人で、悪霊につかれていると言

うのは当然ではありませんか。」と記されています。すごく侮辱的なことばを投げかけていたのです。そして、汚れたサマリヤ人といっさい関わりを持ちたくないと思ったユダヤ人たちの中には、ユダヤからガリラヤへ行くのにサマリヤを通る最短の道ではなく、わざわざ遠回りする道を選ぶ者たちもいました。レジメにも地図を載せておきましたけれども、南のユダヤから北のガリラヤまでは直線ルートで行ったとしても2日ぐらいかかる道のりでしたが、多くの者たちは、その2倍の距離や労力がかかる迂回ルートを使って行っていたのです。もし仮にだれかがここから京都まで歩いて行くのに、大阪の空気を心底嫌って、うるさい大阪の人たちにも会いたくないと言って、奈良をまわって歩いていきますと言い出したとすれば、今の私たちだったら笑うかもしれません。しかし、この当時はそれが当たり前でした。ユダヤ人たちはそれほどまで、どんなに労力をかけたとしても、汚れたサマリヤ人とは関わりを持ちたくないと思っていたのです。そこにある憎しみは本当のものでした。

そして、この背景に付け加えるとすれば、サマリヤ人という存在自体が、人々から忌み嫌われるものだっただけでなく、女性という存在も、当時の社会では軽く扱われるようなものでした。ユダヤ人の男性は普段から公の場で女性と話すことはせず、ましてや女性と一緒に宗教的な話をすることはありませんでした。ですから、この後買い物から帰ってきた弟子たちは、イエス様が女性と話している場面を目撃して驚いていたのです。ヨハネ4：27にこのように書かれていました。「このとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話しておられるのを不思議に思った。」と。イエス様が出会ったのは、サマリヤ人、そして女性という背景を覚えたとしても、多くのユダヤ人たちからすれば絶対にあり得ない、いっさいの関わりを持ちたくない、そんな相手でした。拒絶されていた者たちの中でも拒絶されていた者でした。

しかし、そんなサマリヤの女に対しても、福音の良い知らせをもたらそうとされたイエス様は、サマリヤを通過して行こうとされたのです。あわれみ深い、優しいイエス様は、そんな女性に会うためにサマリヤを通過して行かなければならなかったのです。このすべての出来事は最初から偶然だったではありません。父なる神様のみこころに従って、救いを必要としている者であれば、だれであろうとあわれみを示すためにイエス様は進んでそこを通過して行かれました。そして、イエス様とサマリヤの女との出会いに私たちは、私たちが愛しているイエス様の本当にあわれみ深い二つの姿を見て取ることができます。ですからぜひ私たちが触れたこの背景を頭に入れた上で、続けてイエス様のあわれみ深い二つの姿を実際に見てみましょう。

## ○サマリヤの女との出会い：憐れみ深いイエス様の姿

### 1. 罪人を捜し出してくださるお方 5－9節

まず私たちが見て取れるイエス様のあわれみ深い姿の一つ目は、罪人を捜し出してくださるお方だということです。たとえだれの目にも留まらないようなひどく汚れた罪人のためであろうと、イエス様は自ら喜んでへりくだって、そして自ら進んで救いの御手を差し伸べるお方だったのです。5節のところからこのように「:5 それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町に来られた。:6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。…」と続いていました。今、読んだことばをよく考えてみてください。「イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。」と言われていました。覚えていますか？この福音書を通して著者ヨハネが最初から強調し続けてきたことは、ことばである神の子キリストが、いかに偉大な力を持ったまことの神様であるかでした。ことばであるイエス様こそ、すべての初めから存在し続けていた永遠の神様であって、すべてのものを無から造り出すことができた創造主、主権者であって、いのちの源、まことの光でした。この方が全知全能の神様であるがゆえに、水をぶどう酒に変えることだって容易にできましたし、宮の中から羊や牛、鳩を売る者たちを追い出すことも何の問題もありませんでした。それほどまでにこの方は力強さを持っていたのです。しかし、そんなお方がここで渴きを覚えて疲れ切っていたのです。

## ▶「疲れ」

ここで使われていた「疲れ」ということばですけれども、これにはもともと激しい重労働のゆえにぐったり疲れ果てるとか、疲れ果てて気絶するという意味が含まれていました。要するに、井戸のかたわらに座っておられたイエス様の疲れは、軽いものではなかったということです。それは、まるで農家の人が炎天下の中、朝からせせと畑を耕して夜まで休まずに働いた結果、帰宅した玄関でそのまま倒れて寝てしまうように、井戸のかたわらに腰を下ろしていたイエス様のからだは、文字どおり疲れ切っていたのです。この対比はすごいと思いませんか？圧倒的な力を持っている創造主なる神様が、渴きや疲労を覚えていました。完全な神様であるイエス様は、確かに私たちと同じような完全な人となってくださったのです。人のようなお方ではありませんでした。だからこそイエス様は同じように人が抱えている肉体的な弱さも、疲れも、悲しみも、涙や痛みも、苦しみさえもご存じでいてくださるのです。私たちが抱えるすべてをご存じで、それに必要なあわれみを示してくださるお方だったのです。

私たちとともにどのような時もいてくださる大祭司であるお方は、私たちが理解できないのでも、私たちに無関心なお方でもありません。家族よりも、友人よりも、だれよりも、私たちの弱さを知っていてくださり、そして必要な助けを与えることのできるお方だったのです。感謝なことだと思いませんか？ヘブル4：15で「**私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。**」と言われていました。イエス様は私たちの弱さに同情やあわれみを示すことのできる大祭司でした。そんな人となられたお方だったのです。しかし、それほどまでに疲れ果てていても、イエス様は真っ先に罪人の必要を顧みて、変わらないあわれみを示そうとされる方でもありました。

たとえば、私たちは自分自身に元気があったり、余裕があったりする時であれば、ほかの人のことを気かけやすかったりするでしょう。自分の手が空いている時は、家族や友人の助けになることを進んでなそうとするかもしれません。しかし、逆にやるべきことが積み重なって忙しい時、1日の家事や仕事を終えて疲れ果てて休んでいる時はどうでしょうか？そのような時でも変わらずに、忍耐深さやあわれみを示そうとするのでしょうか？疲労困憊の中にあって、かたくなに言うことを聞かない人に対して、自分が全然知らない赤のほかに人に対して、ましてや人々から煙たがられている人に対しても、私たちは同じように寛容さを示そうとするのでしょうか？もしかしたら私たちは自分のことに心がとらわれて、周りに関心を示そうとしないかもしれません。私たちの模範であって、そして私たちと同じように人となられたイエス様は、たとえ疲れ果てていたとしても、どんな時も失われた者を探して、あわれみを示すことをやめようとはされませんでした。イエス様はどんなに疲れていたとしても、罪人にあわれみを、親切さを、優しさを示すことをやめるお方ではなかったのです。

みことばに戻って続きを見てください。6節の最後のところにこのように書かれています。「……時は第六時ごろであった。：7 ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエスは「わたしに水を飲ませてください」と言われた。：8 弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。：9 そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」——ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである。——」と。疲れ切って井戸に腰掛けていたイエス様のもとにやって来たのはひとりのサマリヤの女でした。一般的なユダヤ人であれば間違いなく相手にもしない、無視するようなそんな存在でした。しかもそんな彼女が現れた時刻は「第六時ごろ」とありました。1日の初めを6時から計算するユダヤ式の時間に当てはめて考えれば、この時刻は、ちょうど正午12時になるのです。つまり彼女は1日の中で最も暑い時間に、ひとりで井戸に水を汲みにやって来たのです。本来であれば、これは不思議な話でした。なぜならこの当時の女性たちは通常何人が一緒になって、朝とか夕方涼しい時間に水を汲みに来るのが習慣になっていたのです。想像できると思いますけれども、水を汲むのは大仕事でした。だからこそ多くの人たちが一緒に来て、涼しい時間にそれをやっていたの

です。それを考えると、この女性はたったひとりで暑い中に、だれも来ないような時間に来ていたのです。いったいどうしてそのような行動を取っていたのでしょうか？その答えは明白でした。イエス様は彼女の乱れた生活に関して続きのところで述べていたのです。ヨハネ4：16－18に「:16 イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」:17 女は答えて言った。「私には夫はありません。」イエスは言われた。「私には夫がないというのは、もっともです。:18 あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。」と記されています。サマリア人はユダヤ人の間でひどく汚れた、不潔な墮落した罪深い存在として扱われていましたけれども、それ以上にこのサマリアの女はサマリア人の中でも、墮落した道徳的に汚れた存在だったのです。彼女は結婚と離婚を繰り返していただけでなく、夫でない者と同棲をしていると書いていました。姦淫に、姦淫の罪を重ねていたのです。サマリアの女は、まさに拒絶されていた者たちの中でも拒絶されていた者でした。嫌われていた者たちの中でも完全に孤立した存在でした。彼女は自分自身のことを恥じていたからこそ、ひとりでした。そして周りの人たちもだれも彼女と関係を持ちたくないと思っていたからこそ、彼女はひとりでした。このサマリアの女ほど神様から遠く離れて墮落し、失われていた者はいないと言っても過言ではなかったのです。

しかし、そんな罪人も救い主の愛の御手のうちから外れていたのではありませんでした。だれもがその存在を無視するような、町で会っても皆がいない者として扱うような、だれも手を差し伸ばそうとしないような者でさえイエス様はあわれみを示されました。そんな彼女が気づく前に、イエス様はまず声をかけられていたのです。これが私たちが愛しているイエス様のあわれみ深さ、そして、私たちがイエス様のうちに見ることのできる本当の優しさでした。ひとりの先生もこの点に関して次のように説明しています。「女性がイエスを見つめ、イエスが女性を見つめる時、二人の間には四つの見えない壁が立ちだかっています。それは、宗教の壁、性別の壁、人種の壁、そして道徳の壁です。しかし、主はそれらすべてを乗り越える道を見つけられました。主が彼女を見つけられ、そして彼女も主を見つけたのです！この物語に偶然は一つもありません。すべての出来事が神の御心の成就の一部なのです。…彼女はキリストを求めて井戸に来たものではありません。しかし、キリストは彼女を求めて井戸に来られました。この働きかけの内に、私たちの主イエスの偉大な心が偏見のないものであることが見て取れます。ほかの人がサマリアに行かず、この女性と話そうとしないことなどは、イエスにとって何の問題にもなりません。イエスは全ての人を受け入れ、誰も拒まれません。ルカ19：10は、主イエスが『失われた者を捜して救うために来られた』と語っています。この物語は、それが何を意味するのかを示しているのです。」と。

どれほど罪深い者であったとしても、救い主の御手から遠く離れ過ぎている者はいませんでした。恵みによる救いは、キリストを信じ受け入れるすべての罪人に対して、分け隔てなく与えられるものでした。それが私たちにとっても、最高の知らせだったのです。過去に私たちがどれほど罪深い存在であったとしても、どれほど今では恥じているようなことを犯していたとしても、どのようなことを犯していたとしても、イエス様のもとに立ち返るのであれば、この方を信じ受け入れるのであれば、同じように恵みによってそこに救いがありました。そんな救いをもたらしてくれる存在こそイエス様だったのです。これが、私たちがいつも感謝することのできるあわれみ深いイエス様の一つ目の姿でした。

## 2. 罪人の渇きを満たしてくださるお方 10－15節

そしてこれに加えて二つ目のあわれみ深い姿ですが、イエス様は罪人の渇きを満たしてくださるお方でした。10－12節に「:10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」:11 彼女は言った。「先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。:12 あなたは、私たち

の父ヤコブよりも偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を与え、彼自身も、彼の子たちも家畜も、この井戸から飲んだのです。」と記されています。イエス様はいつものとおり、話の中心を実際のものから霊的なものへと転換させていました。サマリヤの女は何を言われているのか理解できていませんでしたが、最高の教師であるイエス様は、表面的な問題よりも心の内側の問題に、目を向けさせようとしていたのです。そして、ここで見て取れる問題は、人の心が抱えている、人の心が覚えている渇きでした。考えてみてください、井戸に水を汲みにやって来たサマリヤの女は、確かに肉体面にも渇きを覚えて、実際の水も求めていました。

しかし、それ以上に彼女の心には大きな渇きがあったのです。彼女は自分の渇いた心を満足させるものを男性に求めていました。5回にもわたって結婚した彼女は、その都度思っていたでしょう。今度こそ、この人こそ自分のことを愛してくれると、この人こそ自分を幸せにしてくれると、今度こそこの夫婦関係はいつまでも自分に続く喜びをもたらしてくれるはずだと。しかし、残念ながらどの結婚生活もうまくはいきませんでした。男性との関係は心の渇きを満たすどころか、かえって彼女の上に深い孤独をもたらしました。ますます満たされない虚しさを増し加えることにつながっていったのです。彼女はどれほど心が渇いているのかに気づいていませんでした。求めても、求めてもいつまでも満たされることのない彼女の心は、どれほど渇き切っていたでしょう。彼女は神様ではなくほかのものに、自分の満足を見出そうとし続けていました。しかし、人の心に真に潤いをもたらすことのできる生ける神様を拒むのであれば、それ以外の何かで渇きをごまかそうとしたとしても、不可能だったのです。

そして、この事実は彼女だけの話ではありません。今の私たちにとっても同じように当てはまることです。ここにいる私たちひとりひとりもみな例外ではありません。だれもが日々何かを求めています。自分自身の心の渇きを満たす何かを必死に探していたりします。ある人は何か新しいものを購入することで自分の渇きを満たそうとするかもしれません。自分の欲しいものを手に入れさえすれば、心が喜びにあふれると考えるのです。ある人は趣味や娯楽、仕事に、自分の渇きを満たそうとするかもしれません。自分の好きなことに没頭さえすれば、心に充実感が満ちあふれると考えるのです。ほかにもいろいろなことを挙げることはできます。もし私たちが本当の満足を与えることのできる神様以外のものに、渇きの解決策を見出そうとしているのであれば、心が満たされることは絶対にはないのです。

そのことはかつての信仰者たちも教えてくれます。伝道者の書の中で、ソロモン王様もこのようなことばを残していました。ご存じだと思いますけれども、ソロモン王様は金銀財宝を蓄えていましたし、すばらしい家に住み、庭園を造り、思いつく限りの楽しみや快楽を尽くして生きていました。しかし、そんな彼がこのようなことばを口にするのです。伝道者の書2：10-11に「:10 私は、私の目の欲するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆる楽しみをした。実に私の心はどんな労苦をも喜んだ。これが、私のすべての労苦による私の受ける分であった。:11 しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。」と記されています。

そして、預言者エレミヤも生ける水である神様を拒絶する者たちに対して、このような警告を与えていたのです。エレミヤ2：13に「わたしの民は二つの悪を行った。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。」と大切なことが言われていました。イスラエルの民たちは二つ大きな悪を行いました。一つは湧き水の泉である神様を捨てることでした。彼らはあらゆる力、満足の源であるお方から自ら離れようとしたのです。しかし、悪い行いはそれだけではありませんでした。彼らは神様を捨てただけでなく、代わりに水をためることもできない水ためを自分たちのために掘っていたのです。これはどれほど悲劇的なことでしょうか。考えてみてください、ほかのだれでもない神様がすべての根源、源であるお方でした。この方のうちには、いのちや喜び、楽しみがあり、この方には知恵や力があり、愛や恵みなど何にも変えられない満足があ

りました。ダビデも詩篇 16 : 11 ではっきりと言っています。「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」と。本来であれば、神様に喜んで従ってともに歩む中であって、喜びや満足を直接味わうことができたにもかかわらず、人々はこの方を自ら拒んだと言うのです。

それに加えて、いのちの泉から飲む代わりに、自分たちで地面に穴を掘って、そこにたまった水を飲むことの方が自分に満足をもたらしてくれると考えたのです。泉から直接飲むよりも、その泉から外れたくぼみにたまった泥水をすすするほうが自分たちに満足をもたらしてくれると。もし私たちが泉を前にして、地面にたまった泥水をすすしている人を見るならば、間違いなく言うでしょう「何をしていますのですか、そんな愚かなことはやめて泉から直接水を飲んでください」と。「それがあなたにとって最高です」と。しかし、残念ながらこれこそが私たち罪人が持っている罪深い心の姿だったのです。罪の本質は私たちが何かをする、何かをしないに限った話ではありません。罪というのはそもそも礼拝すべき神様を何かと取り替えること、神様以外の何かに満足を見出そうとすることでした。私たちが神様以外のものに喜びや幸いを求め始める時、それは言うまでもなく偶像礼拝になります。どうしてだと思いませんか？本来なら神様だけが与えることができるものを別の何かと取り替えて、神様を受け入れる代わりに別のものに自分の心をささげることになるからです。

覚えていてほしいのはこの世はいろいろな誘惑をします。私たちがいろいろなところを探し求めれば、この世の中でも喜びや満足、幸せや祝福を見出し、いろいろなものを見出すことができると考えさせようとし、神様以外に何かがあるように思わせようとし、それはすべてうそだということです。私たちが本当に喜びや満足を得たいのであれば、それを与えることのできるお方のもとに行くしかありません。創造の初めから神様は本当の喜びや満足を与えることのできるご自分だけを愛し、従い、この方だけを慕い求めるようにと私たちひとりひとりを造られました。ですから私たちにいつも問われるのは、自分の満足をいったい何に求めているのかということです。そして、もし神様以外の何かを求め続けているのであれば、そこには一時的な満足があったとしても、必ず終わることのない渇きがあります。

みことばに戻っていただくと、イエス様は続きにこのように言われていました。ヨハネ 4 : 13 - 14 「:13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」と。果たして、私たちは本当の満足を与えることのできるお方を求めているでしょうか？それとも与えることのできるお方を拒んで、どれだけ飲んでも渇きを覚えるようなイエス様以外の何かに満足を見出そうとしているのでしょうか？私たちが覚えているべきことは、私たちの愛するイエス様は、失われた者に救いの御手を差し伸べてくださるあわれみ深いお方だということです。

だれの目にも墮落して、完全に孤立していたサマリヤの女には何の希望もありませんでした。だれも関わりを持たうとしなかったのです。しかし、そんな彼女に対しても福音を宣べ伝えようと、サマリヤを通らなければならなかったイエス様は、どんな時も変わらずに愛とあわれみ、恵みを示されるお方でした。そして、感謝なことはサマリヤの女に対してだけではなく、イエス様は同じようにほかの罪人に対してもご自分のもとに来るようにと招いてくださるお方です。ヨハネ 7 : 37 に「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」と書かれています。イエス様こそ生ける水でした。イエス様であってこそ、本当の満足を見出すことができるのです。ですから、もしこの中にまだイエス様のすばらしさを知らずに、いろいろなものを求めて、いつも心の中に渇きを覚え続けている方がいるのなら、どうかきょう知ってください。あなたのその渇きを満たすことができるものは、この世の中に何もありません。その渇きを満たすことができるのは、ただ私たちの愛する救い主イエス・キリストだけです。ですから、どうか神様に逆らう生き方を悔い改めて、本当の満足を与えることのできる生ける水で



あるお方を、自分の救い主、自分の主として信じ受け入れてください。この方とともに歩むことのできる喜びをきょうあなたも知ってください。

そして、もうすでに主のすばらしさを味わっていると言われる兄弟姉妹の皆さん、私たちにとってキリストとともに歩むことができることに勝る喜びはありません。かつて、どんなに何かを求めても渇きを覚えてさまよっていた私たちの心に、本当の満足や潤いを与えることのできるイエス様とともに歩めることは、私たちにとって何にも代えがたい宝です。しかし、同時にイエス様とともに歩いていく生活は容易なものでもありません。キリスト以外のものに目を向けさせようとする誘惑は、私たちの周りにたくさんあふれています。あたかもキリストや神様以外に自分たちの満足を見出すことができるといったうそや偽りはあふれています。キリストのうちに満足を見出し続けるためには、忍耐や葛藤も私たちには必要です。そんな戦いをする中においても、キリストにある喜びやあわれみ深い姿から目をそらさないことです。

かつて、中国で活躍した宣教師のひとり、ハドソン・テラーも同じでした。神様に大いに用いられていたテラーもすべてが順調だったわけではありません。いろいろな難しさを覚えました。病で息子を失うこともありましたし、同じ宣教団の何人もの人が重病を抱えることがありました。文字どおり、さまざまな困難に直面することがあったのです。しかし、そのような難しい中において、彼はこのように口にしていました。『誰でも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。』渇かない人などいるでしょうか？心の渇き、魂の渇き、思いの渇き、身体の渇き、誰もが何らかの渇きを抱えているのではないのでしょうか？いや、どんな渇きであろうと、あるいは全てを抱えたままでであろうと、『わたしのもとに来てそのまま渇いたままでいなさい』とされているのでしょうか？いいえ。違います。『わたしのもとに来て飲みなさい』と言われるのです。イエスは私の必要を満たすことができるのでしょうか？そうです。それどころか、必要を超えて満たしてくださいませ。たとえ歩む道が複雑であろうと、たとえ務めが困難であろうと、たとえ悲しみに打ちひしがれていようと、たとえ愛する人が遠く離れていようと、たとえ自分が無力であろうと、たとえ希望を持たなかりょうと、たとえ魂の渴望が深かりょうと、イエスは全てを満たすことができます。それどころか、全てを超えて、満たしてくださいませのです。」と。これが私たちの愛するあわれみ深い救い主の姿です。すべてを満たすことのできるこの方とともに歩めることを喜んで、この方に目を留めて、今週もともに歩いていきましょう。